

る。たとひそれ以前に溯る場合があつても全く通り一遍のものに過ぎない。蓋し考古學的研究の進歩に一應の關心と理論とを有つてゐても、それを綜合して世界史のシステムに對應するだけの秩序を與へることは至難の業であらうと想像せられる。本書第一篇の如きは、此の點に於いて何人も一讀すべきものである。兩河地方文明、エジプト文明、ミノア、ミケナイ文化などは、右の文化源流の交錯圈、先史世界史の關聯の秩序の裡に正確に位置づけられる。これまでローマ史の部分で説かれてゐたエトルスキ文化はハルスタット期の中に新しき場所を與へられ、先史文化の解明に民俗學的考察の用ゐられてゐることも啓發さるゝ點が多い。是等は古代史家として吾が學界に重きをなす本著者にして始めて能くなし得るところとなしければならぬ。

中世に對して充分なるプロポーシヨンの與へられてゐないこと、サラセン、ビザンツが視野の外に置かれてゐること、是等に就いて不滿を擧げられぬこともないであらう。然し著者の如き人が是等を理由なしにオミットし

或はネグレクトする筈はないのである。先に述べた如く本書は詳悉的ならざる普通史である。本書は著者自身の有つ世界史の體系の見取圖であるが故に貴いのである。ブルックハルトも言つてゐるやうに、大なる列入者にも落穂がある。充實せる除外は空處なる完全にまさる。總てあることは屢々何物でもないことに等しい。あらゆるものを約束して何物も與へない粗雑な著書も行はれる讀書界に、本書の如きは眞に精彩を放つものと言つてよいであらう。(共立社發行、定價貳圓八拾錢)(鈴木成高)

○ The Cambridge Ancient History

Vol. X. The Augustan Empire 44 B. C.—

A. D. 70

本卷は前卷 The Roman Republic 133-44 B. C. の後をうけて昨年出版された。本卷はカエサルの横死よりヴェスパシアヌス即位に至る期間を取扱つてをり、ローマ史に於ける最も重大なる轉期であり、世界史上より見ても極めて重要な時期である。Cook, Adcock, Charleswo-

監修の下になり全卷二十五章に分れてゐる。今、  
に各章の題目と執筆者を挙げて見る。

第一章「カエサルの復讐」はケムブリッジの fellow,  
Charlesworth 氏が執筆、第二―四章は Charlesworth 氏  
とケムブリッジの Tam 氏協同執筆になり、「三頭政治」  
「東西の決戦」、「オクタヴィヤヌスの勝利」の諸項目があ  
り、續く「プリンケプス」、「Senatus Populique Roma-  
nus」はオクスフォードの Honorary Fellow, Sir H. S.  
Jones 氏が擔當、第七―八章「帝國の行政」、「陸海軍」の  
項はオクスフォードの fellow, Stevenson 氏、續いて同  
じくオクスフォードの Anderson 氏の「アウグスツス治  
下の東部邊疆」、大英博物館 H. Idris Bell 氏の「初期プ  
リンケプス統治下のエジプト」、ローマ大學 Monigliano  
教授の「ユダヤのヘロデ」、オクスフォードの fellow, R.  
Syme 氏の「アウグスツス治下の北部邊疆」となつてゐる。  
以下第十三章―十八章は社會、經濟、宗教、文學、美術  
等の項目であつて、ボン大學古代史教授 H. Oertel 氏の  
「地中海地域の經濟的統一」、工業、商業、貿易」、オクス

フォードの fellow, Hugh Last 氏の「アウグスツスの社  
會政策」、ハーバード大學宗教史教授 Nook 氏の「共和  
末期よりネロの死に至る間の宗教的發展」、ケムブリッジ  
の fellow, Glover 氏の「アウグスツス時代の文學」、E.  
Strong 女史の「アウグスツス時代の美術」、ケムブリッジ  
の Adcock 氏の「アウグスツスの功業」と並んでゐる。  
以下十九章―二十五章は帝政期に關したもので、「チベリ  
ウス」、「ガイウス及びクラウヂウス」は Charlesworth 氏  
が擔當し、Monigliano 氏の「ネロ」、Anderson 氏の「チ  
ベリウスよりネロに至る間の東部邊疆」、Syme 氏と Ci-  
arlesworth 氏の「チベリウスよりネロに至る間の北部邊  
疆」、Stevenson 氏の「四皇帝の時代」があり、最後の章  
は「帝國内の反亂」であつて Stevenson 氏 Monigliano 氏  
の協同執筆になつてゐる。

以上は本卷の内容及び執筆者であるが、共和末期より  
帝政初期にかけての各方面がそれ／＼その道の權威者に  
よつて述べられてゐることは本叢書の傳統を恥しめない  
卷末百頁にわたる完璧に近いビブリオグラフィ及び詳

彙報

○京都帝國大學文學部史學科

昭和十年卒業論文題目

國史專攻

- 藤原時代の佛教と貴族 足立 修平
- 近世封建社會と奢侈生活 入江 春男
- 幕末に於ける維新思想 岩田 稔郎
- 幕末武士の生活相に就いて 内田 健一
- 中世に於ける政治觀の一考察 大貫 俊雄
- 近世中期に於ける復古的精神の一考察 岡 潔
- 明治維新と士族 小林 健一
- 足利時代の社會問題 志水 輝彦
- 庄園生活の一考察 田中 稔
- 新井白石の學問と近世社會 竹脇 榮三
- 鎌倉武家社會に就いての一考察 津守 健二

細懇切なる索引の附いてゐることも從來のものと同様である。本巻の利用價值を大に高からしむるものである。筆者は本叢書の全體系が次第に完成に近づきつゝあることを喜び、完成の日を待望するものである。最後に本巻と共に第九第十巻に参照すべき Volume of Plate IV が別巻として出版されてゐること附記しておく。(Cambridge Ambridge at the Univ. Press. XXXII+1057. 1934.)

37 Shilbing)

(顯見)